三味線閑話

＝綱造師から「生寫朝顔話」を聞く＝

吉永孝雄

かつて谷崎潤一郎氏より藝界隨一の美男子と評された綱造師が八月の文樂で珍らしくも若手の松太夫さんの生寫朝顔話の三味線を彈いてゐられる。綱造師の上品な大理石に彫刻されたやうな姿と松太夫さんの懸命の姿が夏の文樂に美しい幻想の世界を繰りひろげてくれる。一日綱造師の樂屋を訪れてお話を聞かせて頂く。

×

松太夫も餘程よくなりました。毎日出演前に稽古を續けて居りますが素直によく直ります。それに若いだけに大變熱心に、ぶつかつて來てくれますので樂しみです。然し本當のものになるのはこれからですから今から無暗とほめて頂いては當人の爲になりません。この道では慢心は絶對禁物でもう「えゝ」と思つた途端藝はぴたりと止まつてしまひます。

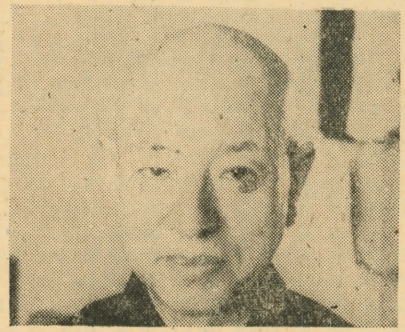
どんな所に力を入れて教へたかと訊かれるのですか。それは樂屋話になりますし折角好評の松太夫の爲にも可愛さうですからその話はやめませう。どうぞ皆樣がどこ迄語れてゐるか舞臺で聞かれて批評してやつて下さい。

ぢや「宿屋」について何か一口でいゝから話せつて。さうですね。この淨るりは普通の時代物でもなし世話物でもなし、所謂世話時代ですから、特にきばつて力を入れる所と云つてありませんが、どの淨るりにも男があると女があるやうにすべて反對のものが出るやうに仕組んであります。勿論先代萩の御殿のやうに女ばかりのものもありますが、矢張善人と惡人との對立があつて芝居になります。

この「宿屋」では駒澤の相役の岩代多喜太が出て來ます。普通は岩代など馬鹿にしてあゝ云ふ風に氣を入れてやりませんやうで、聲のいゝ人は唯、つゆの干ぬ間のを歌ふ朝顔と身の上ばなしをする朝顔にだけ浮身をやつして語りますから、哀れに悲しいだけで一向に面白くない。綺麗一方に出來上つて味ひがもう一つないことになります。

即ち德右衞門が去つたあと、岩代の出から、がらりと變らなくてはなりません。下女が朝顔を通しましよかと言ふのを聞いて、岩代が「十二朝顔」と初めて聞いた名をきゝとがめ「とは、そりや何者だ」と、吐き出すやうにきく。駒澤が、品よくすらりつと「アイヤ、此の道中で琴三味線を彈き、旅の徒然を慰むる瞽女、とやら」と輕く言ひ「拙者も何か物淋しうござれば、ちと琴でも聞かうと存じ、亭主を賴み呼

寄せましてござる。」と語ると「アーイヤ、そりや止めになされい」と頭から大聲で抑へつけます。「トハ又何故な」と尋ねるのを待ち構へたやうに「サレバサ」と強く言ひ「先刻身共が知音たる秋野祐仙、同席いかゞ」と憎々しく刻み「と言はれた貴殿」へゝと馬鹿にして「乞食をば座敷へは通されまいかい」と太く高くどなるやうに言ひ放つて、つんと正面を向いてしまふ。駒澤も默つてゐず「ハテ高の知れた盲目女、まんざら怪しい、ナ、ソレ」と一寸氣をひいてみて、たばこ盆をポンと叩くと「茶箱も持參致しますまい」としつぺい返しの嫌味にぎーつくりと言句に詰まつても減らず口「エーエ、左程御所望ならば兎も角も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと彈かし召されて早くこの場をぼーつ返されよ」と強く飽く迄憎々しくぐうとねぢけて放言する。そこで朝顔が呼ばれる。見るとかつての戀人深雪のおちぶれかはり果てた姿に思はず不愍の者やとせぐり來る、涙を呑み込み乍ら「サヽ早う歌うて聞かせい」と望む千万無量の駒澤の心も知らず頬ふくらして岩代が「テ扨、駒澤氏にはイヤモきつい御執念だ（ハヽ）わい」と冷笑し「アーコリヤ〳〵盲目、何なりともプエー歌へ〳〵」と汚い女が傍に來るのが氣持がわるく嫌でたまらない。うるさくつて仕樣がない。面倒くさいので早く片付けてしまはうとする。所が呼んで見ると顏は美しいし、聲はいゝし、琴は上手なので急に態度が變る。「イヤ、ナニ朝顏とやら、そこは定めて冷えるであらう。身共の傍で今一曲サア〳〵所望だ、所望ーだ」と體をのり出してくる。この變化が語りどころ聞きどころでこの變り目が面白い所です。普通この岩代のこゝの變化がうまくゆかぬ。大體同じ調子に平板に語つてしまふから一向面白味がない。初めは根性惡を言つて憎まれ口を叩いてゐた岩代が朝顏を呼んで見、彈かせてみるとなか〳〵えゝ女、もう、傍の駒澤はほつたらかして「もう一曲」と催促する。駒澤に疲れるから許してやつてはと云はれて「ハーバ、然らば曲は止めにして。アーコリヤ〳〵女、そちも腹からの非人でもあるめ——、身の上話も亦一興、話して聞かせい、サヽどうだい〳〵」と身を乘り出してくる。朝顏の悲しい身の話がつゞく。所がどこ迄も駒澤は朝顏が自分の戀人であることを表面は隱してゐる。朝顏が耳にのこる情の詞に名殘惜しさに泣く〳〵杖をついて部屋を出て行く時昔は駒澤の人形がふとところ紙でそつとあふれる涙をふく、右手にふとところ紙をもつたまゝ去りゆく戀人を伸上つて見送つてゐると、朝顏がつまづくので思はずはつとして紙を落す。岩代は、頭の上から懷紙が、落ちたので變に思つて見上げる。顏見合せて駒澤は、しまつたと上手に向く。岩代は大きく肩をあふぐ。こゝがえゝ所で昔、岩代を多爲藏さんがされましたがなか〳〵面白く遣はれ



鶴澤綱造師

ました。

註、龜松さんの駒澤は持つてゐるきせるを落とします。扇を落とす人もあります。玉彌さんの岩代はこの人の柄にあつてゐてなか〳〵氣を入れてだん〳〵朝顏に心ひかれてゆく變化を巧みに演じてゐた。

すべてこの道では、弟子が熱心に師匠にぶつかつて來ると餘計嬉しくなつて氣のついたことはどん〳〵言ふてやる、いろ〳〵と教へてやるやうになります。人形遣さんでもよく手傳つて間に合ふ者だと、あいつ、えゝ奴やと可愛がられてどし〳〵と師匠から教へこまれて立物になつた人もあります。その方の自傳には自分一人でえらくなつたやうに書いてあつて、かげの師匠が出てゐませんのは殘念なことです。弟子がどうあらうと教へるだけ教へたら自分の藝がその弟子を通じて後世に殘るのだから教へ惜しみをしたらいかんと言はれるのは尤もですがそこが神樣でない凡夫の悲しさでなか〳〵そんな大きな心持になれません。昔節付を教へても時がたつと自分が一人でつけたやうに大きな顏をして威張つてゐるやうな者を見るとこつら憎くなります。

私共の方では弟子の稽古には謝禮の金は一文も取りません。その代り師匠の肩をもんだり、庭を掃いたり、たゝみをふいたり、灰吹を拂うたり、唯で奉仕します。それで眞面目にこつ〳〵働くと餘計可愛いい奴やなと目をかけるやうになります。學校のやうに誰にでも万遍なく公平に教へるのと違ひます。出來てゐる者でも、憎くたらしいとほつたらかしにしときますから何時迄も上手になりません。こちらは腹の中であんな阿呆なこと言ふとる、あんなへま彈いとると、はたで笑つてゐても、つい言ふてやらずに面白がつて聞くと言ふことになります。

稽古にはどこ迄も師匠に兩手をついて來ればなりません。天狗になつたり、生意氣なるを言ふ者には充分教へません。もう一人前や思ふて直す手を止めるともうそれより上りません。これが本人にとつては大損です。自分はもう四階、五階にのぼつてゐる積りでも、まだ〳〵師匠から見ると二階位です。そこで何時迄も慕ふて來ると教へてやる。所が世間では人がほめると自分でえらくなつたやうに言つて教へて貰ふたこと知らぬ顏の人間がゐます。けしからんことでこちらも腹が立つてもう面倒くさくなつて教へません。こちらも叱らず、弟子も慕はず段々水臭くなつて藝はさがる一方です。教へて貰ふなら一生懸命苦勞しなければなりません。

當今は三味線も心細くなりました。どの位もうかりますかと收入を聞いてから弟子入りをしようといふ腹です、前はすきでなつたものです。慾を離れて藝術一本でしたがこの頃は慾一番です、ようけもうかるならやらうでは困つたことです。昔は「よつぽどくさいぞ」と客席からどなつた客がありました。えげつないが油斷がなりませんでした。今はお客さんが手を叩くからと云つてくさい事でも平氣でやる者があります。注意しても聞きません。

この頃は二度三度と聞きにくる人はありません。今迄と違つてお客筋は若い男女か學生が多くなりました。淨るりを聞きにくるのでなく、人形を見にくるので人形部屋にはお客さんがいつもつめかけてゐます。昔は、素淨瑠璃で旅をしたこともあつたのです。淋しい事です。

（筆者は大阪府立大手前高女教諭）